キミと初恋

瑠華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キミと初恋

【Ｎコード】
Ｎ７５１１Ｄ

【作者名】
瑠華

【あらすじ】
毎日、静かに流れる風の音。いつでも、そばにいてくれる日の光。何となく過ぎる平凡な毎日。私はそれがスキだった――――

Ｆｉｒｓｔ　Ｌｏｖｅ~１（前書き）

文も内容もめちゃくちゃですが…
良かったら、読んで下さい。

First Love~1

毎日、静かに流れる風の音。
いつでも、そばにいてくれる日の光。
何となく過ぎる平凡な毎日。
私はそれがスキだった――――

今日の天気は晴れ。気持ちのいい朝、流れる雲。
「きっもち～～♪やっぱ、晴れの日が一番だねっ！」
いつもと同じ道、空、風。
こんな晴れの日が私は大好きだ。
「お～っす！なに大きな独り言言ってんだ？ばかじゃねぇの？」
「ひっどー！！別にいいじゃん！！」
「俺は、お前が周りから痛い目で見られないよーに、注意してるだけだっつーの！」
こいつの名前は、大海湊（おおかいみなと）。私の幼なじみみたいなもんだ。
あぁ～そして、私の名前は葉月笑架（はづきえみか）。中学2年生。
恋愛には、全く興味なしの普通の中学生。
私は、ただ何となく過ぎる毎日がスキだった。
だから、みんなでわいわい遊んだり、騒いだり…そういう青春がスキだった。
恋愛なんて、したことないし、したいとも思わない。
だから、こんなにも私の初恋が近くにあるなんて、思わなかった。

「セーフ！…危ない危ない；；遅刻するとこだった；；みんな、おっはよ～！」
「笑架！おはよ～！！セーフじゃないよ～笑））ギリギリ遅刻でー

す！」
「えっ？！まじで！！まぁいいじゃん。ヒーローは遅れて登場するんだし。」
「いつからヒーローになったんだよ～笑））ばかじゃん！！あははー！w笑））」
このノリがよくて、すごく笑顔が似合うこの子は、私の親友の松坂琉夏。
中学に入ってから、一番最初に出来た友達が琉夏だった。
琉夏は、いつでも笑顔で私の隣に居てくれるんだ。すごくいい友達♪
「ほんとだよ！俺まで遅刻するとこだったじゃん！！」
「はぁ？何言ってんの！あんたが勝手についてきたんでしょ！別に一緒に来たくて来た訳じゃありませんよーだ！」
「はぁ～？ひっで～なお前！！せっかく一緒に登校してやってんのに…」
「はいはい、この話は終わり！ケンカしないの！！」
「琉夏～、だって湊が～」
「文句言わない。ほら、先生来たよ！」
まだ納得のいかない笑架は、ちょっとイライラしながら席についた。
「はい。それじゃ～今日は、みんなと一緒に、これから学校生活を送っていく、転校生を紹介します。仲良くするように！」
はぁ？この時期に転校生？？なんて半端な…
「初めまして。北中から転校してきた、淺海航です！サッカー部に入ろうと思ってます。よろしく～！」
「それじゃ～淺海の席は…葉月の隣だな。葉月、今日の放課後、淺海に校内を案内してくれ。」
「えっ！はっ、はい！分かりました。」
よりによって、なんで私の隣なんだよ；；まぁ、しょうがないか…
「葉月さん？よろしく！」
「うん。私は、葉月笑架！よろしくね～」
そうだよな…これからクラスメイトになるんだよな。仲良くしない

と！
「淺海君って、前の学校でサッカー部だったの？」
とりあえず適当に質問してみた。
「航でいいよ。まぁ～サッカー好きだし。」
「そうなんだ～じゃぁ放課後、サッカー部の見学に行こっか？」
「いいの？！さんきゅ！！」
「いえいえw」
HRが終わったので、私はじゃあね！と言って、琉夏たちの席に行った。

「学校案内か～かったるいなぁ～；；」
今日は、ゆっくり帰りたかったのに…
「まぁまぁ。いいじゃん、たまには～」
「そんな人ごとだからってぇ…」
「分かった分かった。今日、私も付き合うから。」
「ほんと？！ありがとー♪」
琉夏ってほんと、どこまでいい人なのだろうか？私ってほんと幸せだなぁ。
「じゃぁ、俺も付き合うよ！どーせ暇だしっ！」
「えー湊はいいよ～」
「なんだよ！人がせっかく親切に…」
「そんな気つかわなくていいから！笑））じゃぁ！」
今日は、湊とは顔を合わせる気分になれない。
さっきのことがまだ引っかかってて、今はちょっと機嫌が悪い。
まぁ、明日になれば戻ってるだろうけど…
「じゃぁ、放課後ねっ！」
「はいはい。了解。」
あ～ぁ、なんで琉夏が私の隣じゃないんだろ…
「はぁ…えっと、1時間目は…げっ！英語じゃん；；宿題やってない…」

英語だけは、無理なんだよなぁ←
どうしよ…普通にやばいよね…
「？どうしたの？なんか悩み事？」
そう言って、話しかけてきたのは、隣の席の…今日転校してきた航だった。
「えっ！いや…その…英語の宿題忘れちゃったみたいで…」
何て言う嘘だ。ほんとは、忘れたんじゃなくて、やってないのだ。
でも、忘れたと言っといた方が聞こえがいいから…
「えっ？そうなの？じゃぁ、俺の見せよっか？？」
「えっ、なんで宿題やってるの？今日来たばっかなのに…」
「昨日渡されたから。あぁ～でも、忘れたんじゃ、見せても意味ないよね。」
「えっ！実は、持ってきてる！！やってないだけ；；」
あっ、やばいと思いながら、笑架はとっさに謝った。
「別にいいよ。はい、これ。」
そう言って、航は宿題のプリントを私に見せてくれた。
「あっ、ありがと！」
そう言って、宿題を見せてもらった1時間目。
窓の外の空は、すごく綺麗だった―――

そして、放課後―――
「うちは、松坂琉夏。みんな琉夏って呼んでるから、そう呼んで！よろしくねっ♪」
「うん、よろしく。琉夏って葉月の友達？」
「うん♪私の大事な親友なんだから♪」
私は、自慢げに琉夏を紹介した。
「じゃぁ、サッカー部見に行こっか！」
「うん。よろしく。」
航は、優しくて、ちょっと大人っぽさが感じられる。そのくせ、子

供みたいに無邪気に笑う。
そんな航と一緒にいて、笑架は悪い気はしなかった。
「じゃーん！ここがサッカー部！部員多いんだよ～」
「うっわ！すげぇー！！やっぱ、都会の学校は違うな！」
「でしょ？ゆっくり見てていいよ。じゃぁ、私たち帰るから。ばいば～い。」
「えっ！もう帰んの？」
「ごめんね～今日は、ゆっくり帰りたいからさ～」
早く帰らないと、いつもの夕日が沈んじゃう。
そう思っていた笑架は、やたらとソワソワしていた。
「そっか…じゃぁな！」
「うん、ごめんね。ばいばい！」
私は、琉夏と一緒にワクワクしながら、いつもの河原に向かった。
これから起こることも知らずに…

「良かった～間に合ったぁ♪やっぱ、きれいだなぁ♪」
「ここにくると、1日の疲れが全部飛んでっちゃうね！w」
この河原は、学校の近くにあるお店のすぐ近くにある。
ここから見る夕日はすごく綺麗で、この河原を見つけた日から、よく来るようになった。
「だよね～♪……あのね、笑架、話があるんだけど…」
いきなりまじめな顔になって、琉夏が静かに口を開いた。
「あのね、うち…航君のこと好きになっちゃった…」
「えっ！」
静かに、優しい風が吹いた。
まるで、今の琉夏の心みたいに…
「そっか！そうなんだ♪私、協力するよ！頑張って！！」
私の中で、なにかが壊れた。
自分でもなにが起こっているのか分からなかった。
「えっ！ほんと？ありがと～♪笑架大好きだよ！！」

「うん、わたしも琉夏のこと大好きだよ♪…」
この気持ちは嘘じゃない。私は嘘なんてついてない。
なのに、この罪悪感はなんだろう…
あれ？…よく分かんないや…なんでなんだろ。
「ん？笑架？どうかしたの？」
「えっ？いや、別にどうもしないよ！さっ、帰ろっか！」
私、ちゃんと笑えてる？笑えてるかな…？

夕日は、もう沈んでいた。薄暗くなった河原を、１人で歩いて帰った。
琉夏は、これから塾だから、別の道を歩いて帰ってしまった。
何でか知らないけど、すごく悲しかった。辛かった。
今は、ただただ泣きたかった――――
優しい風が、また私の隣を通った。
気づいちゃいけない、この気持ち。なかったことにしたい、この気持ち。
いっそ、私の心なんか消えちゃえばいいのになんて思った。
…でも、気づいてしまった。私の本当の気持ち。

“私は、航のことが好きだ――――”

気づいてしまった。もう戻れない。もう引き返せない。
でも、絶対言わない。この気持ち…

一筋の雫が、綺麗な空に流れた。

First Love~2

暖かい日の光。
優しい風のにおい。
今日もいつもと同じ1日が始まった。

「おっじゃまっしま～す！おぃ、笑架！！起きろよ！！」
「う～ん…なに！勝手に入ってくるなーー！！湊のバカ！！」
「なんだよ！せっかく迎えに来てやったのに…」
「あっそ！んなの頼んでないから、さき行っていいよ。」
もう、朝からうるさいな～！湊は！
「やだ。今日はお前に話があったから、迎えに来たんだよ！」
えっ？なに？なんかいつもと様子が違う…
なんで、こんなまじめな顔なの？こんな湊、今まで見たことない…
「…だから。」
「えっ？いま、なんて…」
「だから！俺、お前のこと好きだから。俺と付き合えよ。」
は、い？なんで、湊から告られてんの？
わけわかんない…
「は？意味分かんない。なんで、私があんたなんかに…」
「俺は本気なんだよ！そんな言葉で、俺の気持ちなかったことにするな！」
私の言葉は、湊の声でかき消された。
なんだよ、それ…なかったことにするなって、私に言ってるのか？
「ごめん、私は湊の本気には答えられない。」
絶対言わないと決めていた気持ち。
「は？！なんでだよ…」
なかったことにしたかった私の気持ち。

「…私っ！航のことが好きなの！こんな気持ち初めてで…」
でも、逃げていてもなにも変わらない。
私は、もう自分に嘘をつきたくない。
「そっか…ごめん。じゃぁ俺さき行ってるから。」
「うん、ごめんね。」
「いいって！きにすんなよ！お前にんな顔似合わねぇから。」
「ひっどー！なんだよ、それ！」
「じゃぁな…」
優しく微笑んで、湊は私の部屋から出て行った。
まるで、あの日の光のように、暖かい目をして———

琉夏が航のことが好きだと言ったあの日から、何日たっただろう。
ただ、何気ない毎日が私は好きだったのに、今じゃ何かものたりない。
私は、恋愛なんかに興味なかったのに…
でも、航が来てから、私は変わった。
だからこそ、逃げないで向き合おうと思った。

「琉夏…あのさ…実は私も航のことが好きなんだ…」
ビックリした顔で琉夏は、私の目をみつけて口を開いた。
「そっか～♪そうなんだ！大丈夫、気にしないで～うち、今は湊のことが好きだから。」
えっ…いまなんて…
「えっえぇーーー！！！いつから？！」
「えっ？うんと、昨日から。」
そっか～そうなんだぁ～と、ホッとした顔で笑架は言った。

それから、私たちはいつも通り変わらない生活を送っている。
やっぱ、もう少し、今のこの青春をたのしんでおきたかったから…

告白する勇気が出たら、告白しよう！と思っていた。

中学3年。3月、卒業式の日―――
今日も、暖かい日の光や、優しい風のにおいが私のそばにあった。
「今日で、卒業か～…やっぱ、さみしいね…」
「そうだね…3年間お世話になった、うちらの思い出の場所だもんね…」
「そうだっ！ねぇ、河原行こっ！」
「ちょっと、待ったー！笑架、さきにやることあるでしょ？」
「えっ？！…ごめん！琉夏！さき河原行ってて！！」
「はいはい。了解！頑張ってな！！」
「うん、ありがと♪行ってくる！」
私は、3年間過ごした思い出の場所をかけぬけ、校庭へ向かった。
あいつなら、あそこに居るからな、絶対！
そう思って向かった先には、航が居た。
「はぁ、はぁ…良かった！まだ居たんだ！」
「なに、お前走ってきたのかよ！どうしたの？」
「えっ？あっ…もう卒業だね…なんか、短かったな～」
「そうだな。俺が来てから、もう2年たつのか…早いよな。」
また、いつもの優しい風が吹いた。
私の初恋もここで始まったんだ。
そして、私はあのころより大きくなった。変わった。
初めて、人を好きになって、初めて人に告白されて…
そして、今、初めて告白する。
「航！私、ずっと航のことが好きだったんだ！」
「えっ！」
「だから、付き合ってほしいとか言わないけど、航の気持ち知りたくて…」
「…俺から言おうと思ってたのに…」
「えっ？ごめん、よく聞こえない～」

「俺も、お前のことが好きだ！俺と付き合って下さい！！」
「えっ！ほんとに？」
「嘘ついてどうすんだよ！」
「だって…私、夢見てるのかな？」
「だったら起きろ！」
「ありがとー！私も、航が大好きだよ！」
「おう。」
気がついたら、私は航の胸の中にいた。
暖かいこのぬくもりを私は、きっと忘れない。
だって、あんたは私が初めて好きになった人だから———

春の風は、あのときよりも暖かくて、優しかった。
ただ何気なく過ごす、そんな日々がスキだった。
だけど、今は風に見守られてるって分かってるから、逃げずに向き合える。
そんな私とキミの初恋———

Ｆｉｒｓｔ　Ｌｏｖｅ~２（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！！
感想やアドバイスなどくれると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7511d/

キミと初恋

2010年12月14日18時00分発行